2006 年 9 月 2 日

岡倉天心　国際シンポジウム

「茶の本」100 年　に参加して

堀尾哲一郎

天心の命日 9 月 2 日に有楽町朝日ホールで開催されたシンポジウムに参加した。100 年前にニューヨークで出版された岡倉天心の”The Book of Tea”（茶の本）を再考するシンポジウムである。スピーカーやパネリストはこの分野の識者（アメリカやドイツからも招聘）で、非常に贅沢なメンバーによるポイントを的確に捉えたシンポジウムで、感銘を受けた。しかし、5 時間のシンポジウムであったが、内容に比べて時間が限られており、消化不良であった点、残念であった。

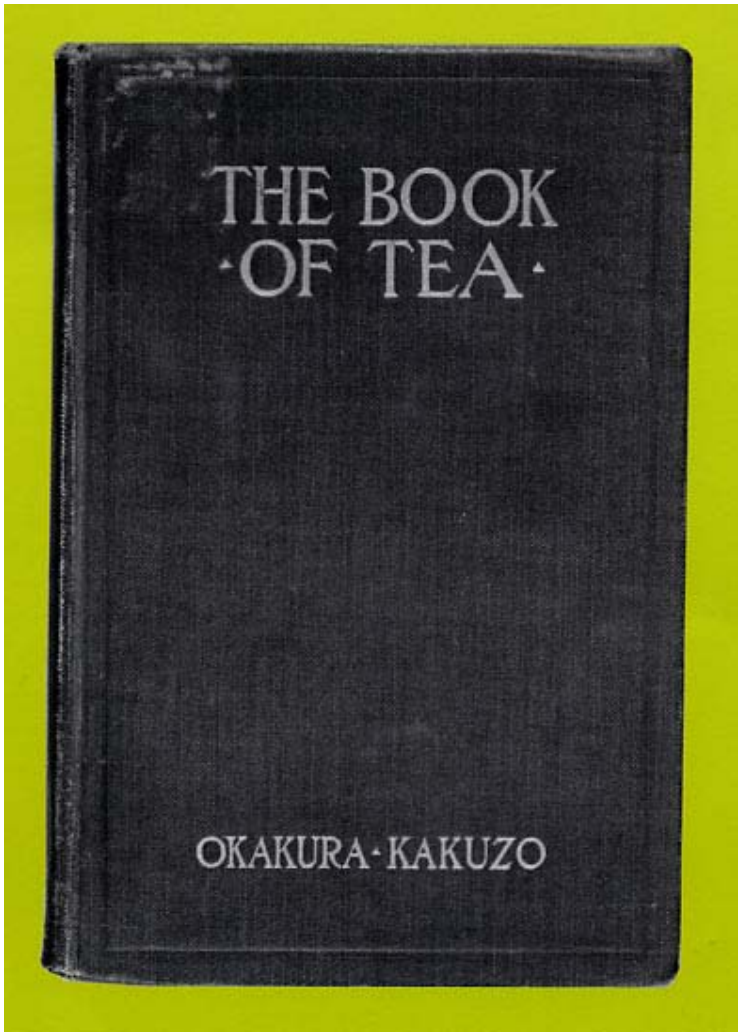
開会の辞で、主催者の（財）三徳庵の田中仙堂氏から本シンポジウム開催の趣旨説明があった。

第一部基調講演、その 1 ではボストン美術館のアン・ニシムラ・モース氏から岡倉天心とボストン美術館との関係について説明があった。その 2 では建築家の磯崎新氏から「空虚な空間」と題して（1）アメリカの建築家に「茶の本」がどう影響したか？（2）五浦の六角堂は茶室か？（3）現在、「茶の本」をどう読むか？について見解が披瀝された。特に、「茶の本」第三章に書かれている、「部屋というものの実質が、屋根や壁それ自体でなく、屋根や壁に囲まれたからっぽの空間にある」という見解の重要性を強調された。その 3 では編集工学研究所の松岡正剛氏は「負の想像力」と題して「茶の本」第四章茶室と関連して、枯れ山水を例に不完全さを想像力で補う未完成の美の重要性を力説された。雪舟の「白紙も模様のうちなれば、心で補うべし」という考えと通じるところがある。その 4 では林原美術館の熊倉功夫氏は「茶道論の系譜から見た『茶の本』の異質性」と題して、「茶の本」には茶道の作法や道具などについて一切触れられておらず、従来の茶道論からすれば異質であり独創的と言えると評価した。その 4 ではドイツのアーヘン工科大学のマンフレッド・シュバイデル氏が「天心とブルーノ・タウト」と題して桂離宮を例に両者の比較を試みた。

第二部スライドショーとパネル・トークのスライドショーでは岡倉天心の玄孫で写真家の岡倉禎志氏が岡倉天心の中国・インド旅行の足跡を辿って撮影したスライドの紹介があった。続くパネル・トークでは「茶の本」の新訳本を出された東京女子大学の大久保喬樹氏、写真家・天心言玄孫の岡倉禎志氏、世田谷美術館の酒井忠康氏、詩人のアーサー・ビナード氏の 4 氏をパネラーとして

田中仙堂氏が司会を務め「茶の本」の魅力について討論が行われた。「茶の本」は日本文化論の古典として、茶道を軸として日本およびアジアの文化のエッセンスを語ったものですが、出版から 100 年経った現在、近代西欧文化原理のゆきづまりを打開するポストモダン文化原理を模索する現代の私たちに示唆を与えてくれます。パネル・トークの間、バックスクリーンには五浦の六角堂に設置した 3 台のカメラから 24 時間海を撮影したパノラマが時間を短縮して映し出されていましたが、非常に効果的でした。私は数年前、五浦の六角堂を訪ねたときのことを思い出し、一層、印象的でした。

閉会の辞は共催者のワタリウム美術館の和多利浩一氏が行い、本日のシンポジウム内容は来年小学館スクウェアから出版される予定であるとアナウンスがあった。約 1000 名の参加者はそれぞれ強い印象を受けたものと思う。



1906 年ニューヨークのフォックス・ダフィールド社出版された
「茶の本」の表紙